山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第273集

御所山遺跡

（ごしょやま）

― 山梨リニア実験線境川土捨場造成事業に伴う発掘調査報告書 ―

2011.3

山梨県教育委員会
鉄道建設・運輸施設整備支援機構

御所山遺跡

ごしょやま

― 山梨リニア実験線境川土捨場造成事業に伴う発掘調査報告書 ―

2011.3

山梨県教育委員会
鉄道建設・運輸施設整備支援機構

御所山遺跡のあらまし

御所山遺跡の所在する笛吹市境川町は、甲府盆地の南東部、僅かな北西部の沖積地を除いて大部分が曽根丘陵上にあり、写真のように、御所山遺跡は、甲府盆地に突き出す丘陵の先端部、標高317m程に位置し、すぐ北側には、中央自動車道(下り)境川PAがあります。

下の写真を見てください。ご覧のように、右側に大規模な工事が行なわれていることがわかります。これは、山梨リニア実験線のトンネル工事に伴う土捨場の造成工事で、○印の部分にも掘削が及ぶことになり、今回の発掘調査に至りました。

御所山遺跡上空写真

【調査の流れ】

表土剥ぎ

確認作業

遺構掘り下げ

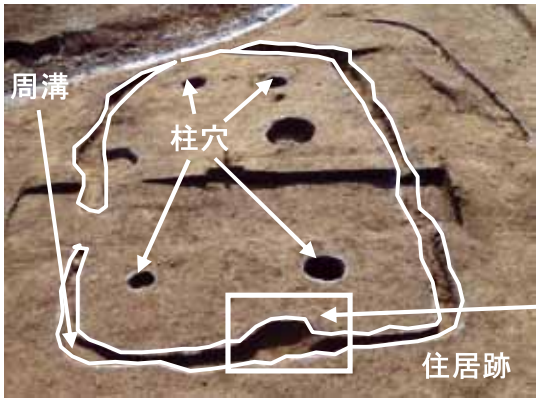
遺物出土状況

作業風景

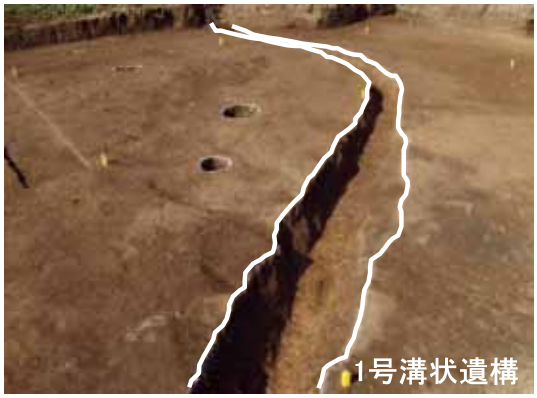
空撮風景

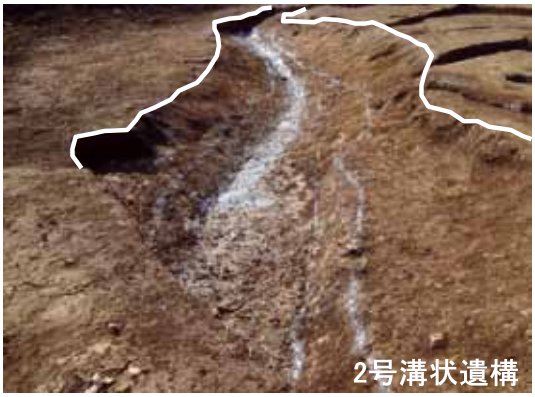
【調査の成果】

航空写真のとおり、狭小な範囲での発掘調査でしたが、住居跡1軒、溝状遺構3条、土坑2基、ピット7基が検出されています。



住居跡は古墳時代前期のもので、炉は確認できませんでしたが、柱穴や周溝が検出されています。
遺物は、少量でしたが台付甕の底部や口縁の部分が出土しています。





この他に、御所山遺跡では、3条の溝状遺構が確認されています。
溝の性格は不明ですが、僅かな遺物から推測すると、江戸末期（近世）頃のものと考えられます。
このように、検出された住居跡や、出土した遺物は位置や高さを正確に測り、図面を作成していきます。記録保存のための重要な作業です。

【発掘調査が終わって】

上記のように、発掘調査が終了すると、いよいよ発掘調査報告書の作成に取りかかります。細かい整理作業となりますが、作業員さんの地道な作業により、報告書が完成するわけです。

御所山遺跡は、狭小な面積での調査ですが、古墳時代前期の住居跡と、近世の溝状遺構、や土坑等が検出されました。曽根丘陵上には、旧石器～中・近世の遺跡が数多く存在する遺跡の宝庫で、御所山遺跡と同時期である古墳時代前期の遺跡も数多く存在し、200m南隣の諏訪尻遺跡でも同時期の住居跡が20数軒見つかっています。
このことから、この地域が当時の生活環境や社会背景等安定した、地域だったことが解ります。

序　文

本報告書は、山梨リニア実験線に伴う境川土捨場造成事業に伴い、平成21年10月～11月初旬にかけて発掘調査された、山梨県笛吹市境川町藤垈に所在する御所山遺跡について、その成果をまとめたものです。

発掘調査が行われた御所山遺跡は、曽根丘陵の一支丘の先端付近に位置しています。この曽根丘陵は、甲府盆地の南縁、御坂山地北麓の丘陵で、東は笛吹市境川町坊ヶ峰、西は市川三郷町大塚に至る東西約15㎞、南北約４㎞に広がっており、古くから旧石器時代～中世に至る遺跡の宝庫として知られています。

御所山遺跡は、古墳時代初頭の住居跡１軒のほか、溝３条、土坑２基、焼土跡１基、ピット７基を検出いたしました。遺物についても縄文時代の石器や、古墳時代前期の台付甕、近世の陶磁器など少量ではありますが、確認されています。

本遺跡南の谷を隔てた約300ｍ南東側には、平成９年（1997）度～平成10年（1998）度に当埋蔵文化財センターが発掘調査した諏訪尻遺跡があり、調査の結果、弥生時代から古墳時代の集落跡や、低墳丘墓、方形周溝墓を中心とした墓域、さらに旧石器時代の石器や、縄文時代前期の住居跡など、数多くの遺構や遺物が確認されています。

本遺跡も、確認された住居跡が諏訪尻遺跡で確認されている弥生時代～古墳時代の集落との関わりに注目されますが、直線距離で約2.1㎞に位置する国指定史跡「銚子塚古墳附丸山塚古墳」をはじめとする前期古墳との関わり等、これについて、まだまだ周辺の遺跡の状況を把握する必要があります。

今回の調査では、以上に挙げたような発掘調査成果ではありますが、曽根丘陵の歴史を解明する上では、有意義であったと思います。

本書が学習・研究の資料として活用をされることを念じております。

なお、末筆となりましたが本調査にご協力を賜った関係各位、ならびに直接調査に関わった方々に厚く御礼申し上げます。

2011年３月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　**小　野　正　文**

例　　言

1　本書は山梨県笛吹市境川町藤垈字御所山4073外に所在する御所山遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、山梨リニア実験線建設境川土捨場造成事業に伴うものであり、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構の依頼を山梨県教育委員会が受け、発掘調査、整理作業、報告書作成を山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査は、2009（平成21）年10月１日から着手し、11月10日に終了、基礎的整理は2009（平成21）年12月１日～12月25日、2010（平成22）年２月１日～３月２日、本格的整理は、2010（平成22）年６月１日～９月８日まで実施し、年度末まで報告書作成をおこなった。

4　本書の編集、執筆は高野玄明が行なった。

5　本書に掲載した発掘現場での写真は、高野玄明、小林万里子、遺物写真については、高野玄明が撮影した。

6　発掘調査に係る世界測地系に基づく測量、グリッド杭設定、基準標高杭設置は株式会社一瀬調査設計に委託した。

7　本書に掲載した遺跡空中写真は、株式会社東京航業研究所に委託し撮影した。

8　本書に係る出土品及び記録図面、写真、デジタル化したデータ等は、一括して、埋蔵文化財センターに保管している。

9　発掘調査及び報告書作成にあたって下記の方々にご協力を頂いた。記して謝意を表したい。
笛吹市教育委員会、大林・東亜・大和小田急山梨リニア実験線、御坂トンネル（西）他特定建設工事共同企業体

凡　　例

1　掲載した遺構図面の縮尺は原則として下記の通りである。
［遺構全体図］　遺跡位置図　1/25,000　調査区位置図　1/1,000　遺跡全体図　1/200
［遺構微細図］　平面図1/60　1/80　断面図・土層図　1/60　1/80

2　遺物実測図の縮尺は次の通りである。
土器・陶磁器・石器　1/3　　石鏃1/2

3　遺物実測図の断面の黒色は、陶磁器片を示す。

4　SP・EP脇にある数値は標高を示す。

5　表内の（　）内の数値は、推定値である。

目　　次

序
あらまし
目次
例言・凡例

第１章　調査に至る経緯と経過……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査に至る経過……1

第２章　遺跡の環境……3
　第１節　地理的環境……3
　第２節　歴史的環境……3

第３章　調査の方法と基本層序……6
　第１節　調査方法……6
　第２節　基本層序……6

第４章　発見された遺構と遺物……6
　第１節　遺　構……6
　　第１項　竪穴住居跡……6
　　第２項　土　坑……8
　　第３項　溝状遺構……8
　　第４項　焼土跡……9
　　第５項　ピット……9
　第２節　遺　物……9

第５章　総　　括……17

図　版　目　次

第１図　御所山遺跡発掘調査位置図…… 2
第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡…… 4
第３図　御所山遺跡全体図・グリッド配置図…… 7
第４図　第１号住居跡、第３号溝状遺構、第１・２号土坑平面図……10
第５図　第１号溝状遺構平面図……11
第６図　第２号溝状遺構平面図……12
第７図　ピット１～６、焼土跡平面図……13
第８図　ピット７平面図……13
第９図　出土遺物（その１）……14
第10図　出土遺物（その２）……15

写真図版目次

写真図版１　調査区全景（直上から）、調査区全景（南西方向から）
写真図版２　基本層序：土層堆積状況、作業風景、１号住居跡遺物出土状況、１号住居跡東西方向セクション、１号住居跡完掘状況（北から）、１号住居跡完掘状況（南から）
写真図版３　１号溝状遺構セクション（西側）、１号溝状遺構（南東部分）、１号溝状遺構（北西部分）、１号溝状遺構（東側）、１号溝状遺構セクション（東側）
写真図版４　２号溝状遺構完掘、２号溝状遺構セクション、１号土坑セクション、１号土坑完掘、２号土坑完掘
写真図版５　焼土跡・ピット６完掘、焼土跡セクション、ピット６セクション、ピット１セクション、ピット４セクション、
写真図版６　ピット７セクション、ピット１～５完掘
写真図版７　１号住居跡出土遺物、１号溝状遺構出土遺物、２号溝状遺構出土遺物、３号溝状遺構出土遺物、遺構外出土遺物
写真図版８　磨石、石鏃、火打ち金

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

御所山遺跡は、山梨県笛吹市境川町藤垈字御所山4073他に所在する山梨リニア実験線建設に伴う境川土捨場造成工事に伴い行われた遺跡である。

境川土捨場については、平成３年に埋蔵文化財の有無の確認調査が行われ、いくつかの埋蔵文化財包蔵地が確認され、その内の埋蔵文化財包蔵地は諏訪尻遺跡として本調査が２カ年にわたって実施されている。

平成21年度に於いて、リニア実験線建設工事が本格化となり、境川土捨場造成工事も具体化された。

造成工事により、掘削が及ぶ箇所など確認したところ、不明瞭な部分があったため、鉄道運輸機構、JV、県教育委員会、埋蔵文化財センターと協議を行い、再度、試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は、６月に実施し、調査区約600㎡程の範囲にトレンチ６本を設定し、調査を実施した。

調査の結果、いずれのトレンチからも溝状遺構やピット、土坑等の遺構や、遺物など古墳時代前期～中・近世の遺構や遺物が確認されたことから、新たな遺跡、「御所山遺跡」として諸手続を行った。

試掘調査の結果を踏まえ、再度4者で協議を実施し、早急に本調査が必要となったことから、予算措置、発掘調査に係る準備などの結果、10月より１ヶ月の予定で本調査を実施することとなった。

前述したように、御所山遺跡は、古墳時代前期、中・近世の遺跡として、約600㎡が調査対象地となり、平成21年10月１日の表土剥ぎから、同年11月10日の埋め戻しをもって発掘調査を終了している。

整理作業については、同年12月と翌年の２月の合計２ヶ月間において基礎整理作業を行い、翌年度平成22年度の６月より９月初旬において本格的整理を行い、発掘調査報告書の刊行を平成23年３月に行なった。

御所山遺跡の試掘調査を含んだ諸手続、並びに本発掘調査に関わる文化財保護法の諸手続は以下のとおりである。

平成21年（2009）６月11日	文化財保護法第97条第１項による遺跡の発見通知を、山梨県教育委員会教育長に通知。
平成21年（2009）６月11日	文化財保護法第100条第２項による埋蔵文化財の発見届けを、山梨県教育委員会に提出し、笛吹警察署への通知の依頼。
平成21年（2009）10月８日	文化財保護法第99条第1項による発掘調査の報告を、山梨県教育委員会教育長に提出。
平成21年（2009）11月11日	発掘調査の終了報告を山梨県教育委員会教育長に提出。
平成22年（2010）３月３日	発掘調査の実績報告を山梨県教育委員会教育長に提出。

第２節　調査に至る経過

１・調査期間

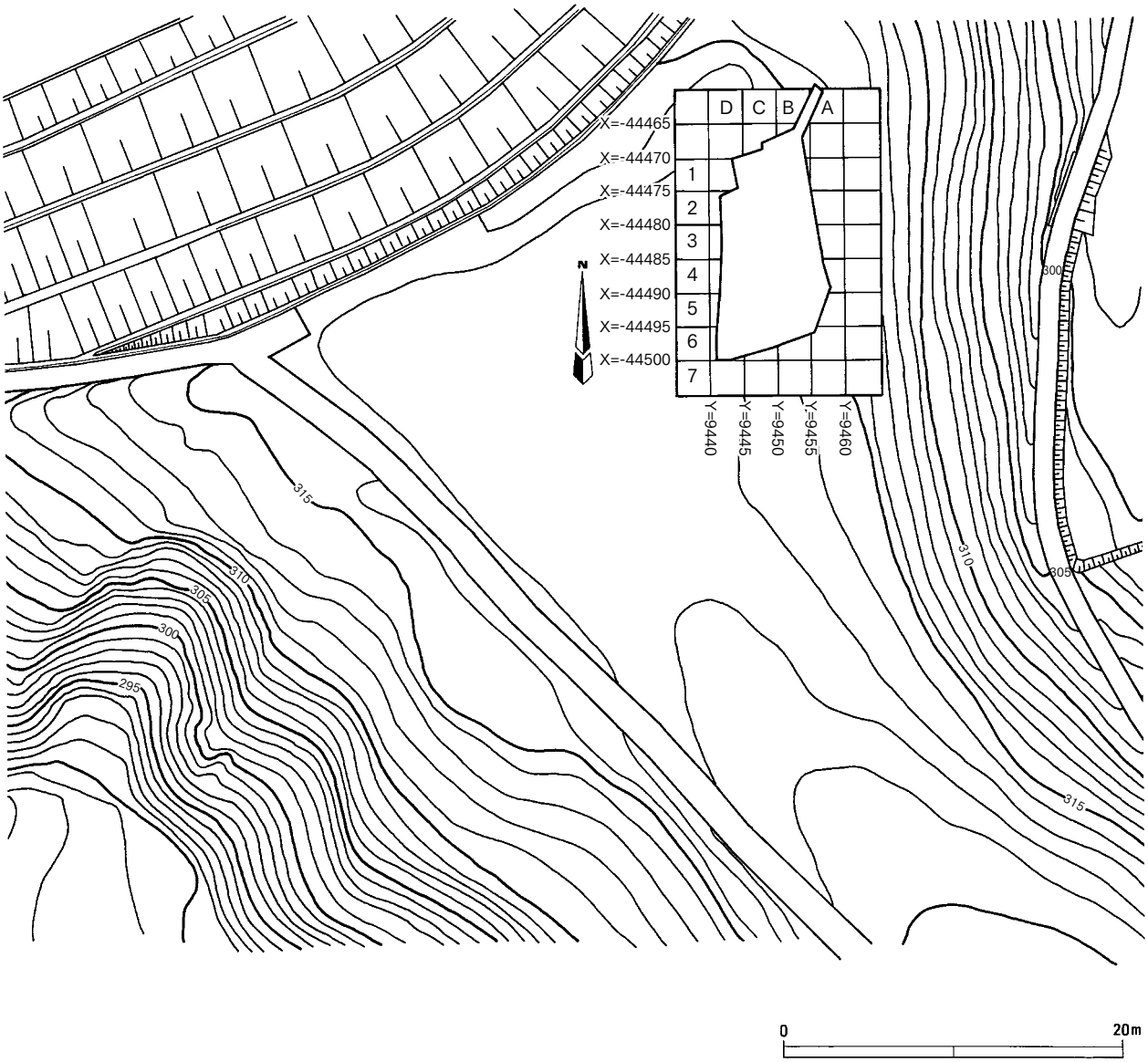
本発掘調査は、雑木林の伐採の終了後、平成21年（2009）10月１日より重機による表土剥ぎから開始した。

表土剥ぎは試掘調査の結果確認された第３層の黄褐色粘質土の上面まで重機により掘り下げ、伐採された切り株などは残しながら行った。重機により表土を除去した後、人力により遺構精査を行い、遺構プランの確認や、遺物の検出に努めた。

２・調査区と調査の方法（第１・３図）

調査区は東西約17.0m、南北約35.0mを測り、世界測地系の座標にあわせた５m四方のグリッドを設定し、調査区全体を覆い、南北方向は北～南へ１～７、東西方向は東～西へＡ～Ｄと設定した。これにより、Ｃ－１杭がＸ＝－44470、Ｙ＝9450、Ｄ－７杭が、Ｘ＝－44500、Ｙ＝9445となる。

調査方法は、重機で表土を包含層及び遺構確認面まで除去したあと、作業員により精査を行い遺構プランや遺物の検出につとめ、確認された遺構等については、土層確認のためのセクションベルト等を設定しながら掘り下



第１図　御所山遺跡発掘調査位置図（Ｓ＝1/1000）

げを行うなど、図面や写真撮影等の記録作業を行いながら調査を進めた。包含層等は各グリッド毎に土層観察用のベルトを設定し、遺物等の記録を行いながら掘り下げを行った。

３・調査組織

調査主体：山梨県教育委員会

調査機関：山梨県埋蔵文化財センター

〇平成21年度（2009）試掘調査

調査担当者：高野玄明、小林万里子

試掘作業員：池谷千代子、田中一秋、千野富子、山﨑けい子

〇平成21年度（2009）発掘調査

調査担当者：高野玄明、小林万里子

発掘作業員：飯室恵子、池谷千代子、伊藤津真子、橘田ゆり子、千野富子、土井みさほ、前田みつ子、米山孝子、渡辺木乃女

整理作業員：小菅春江

〇平成22年度（2010）本格的整理作業

調査担当者：高野玄明

整理作業員：土井みさほ

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

笛吹市は甲府盆地の中央部やや東寄りに位置し、甲府盆地の南縁に連なる曽根丘陵の東方に位置し、奥秩父山系の一つである標高2,475ｍの甲武信ヶ岳に源流を発し、南巨摩郡富士川町で釜無川と合流して富士川となる笛吹川の中流域を占めている。笛吹市の地形ついて、市の南東側は御坂山塊北斜面の山地や丘陵、笛吹川の支流である狐川、浅川、金川、日川等、また、日川に流入する大石川、京戸川等の河川がそれぞれ形成した扇状地が広がり、市の北側では大蔵経寺山や兜山等をはじめとする秩父山系の山々等から運ばれてきた土砂が笛吹川や平等川により拡散され、形成された沖積地が広がっている。

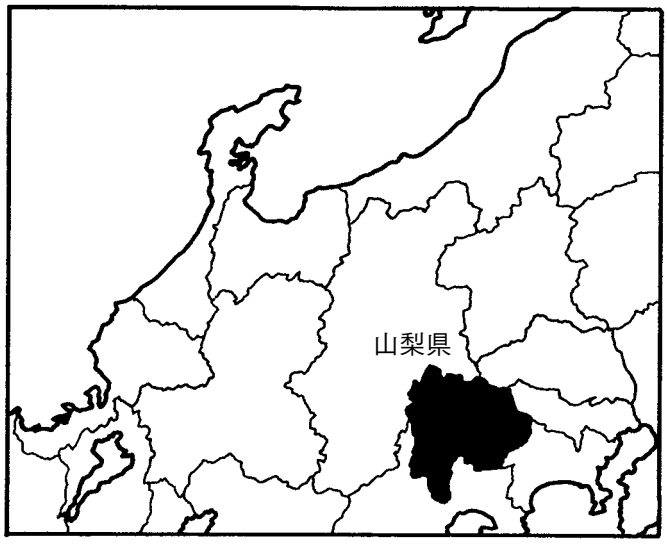
御所山遺跡は、笛吹市境川町に所在し、僅かな北西部を除いて大部分が曽根丘陵上にあり、この曽根丘陵は盆地に向けて大小多数の支丘を突き出しており、御所山遺跡は間門川と境川とに挟まれた中央付近の一支丘の先端、中央自動車道下り線境川パーキングエリアの背後、標高約317ｍに位置する。

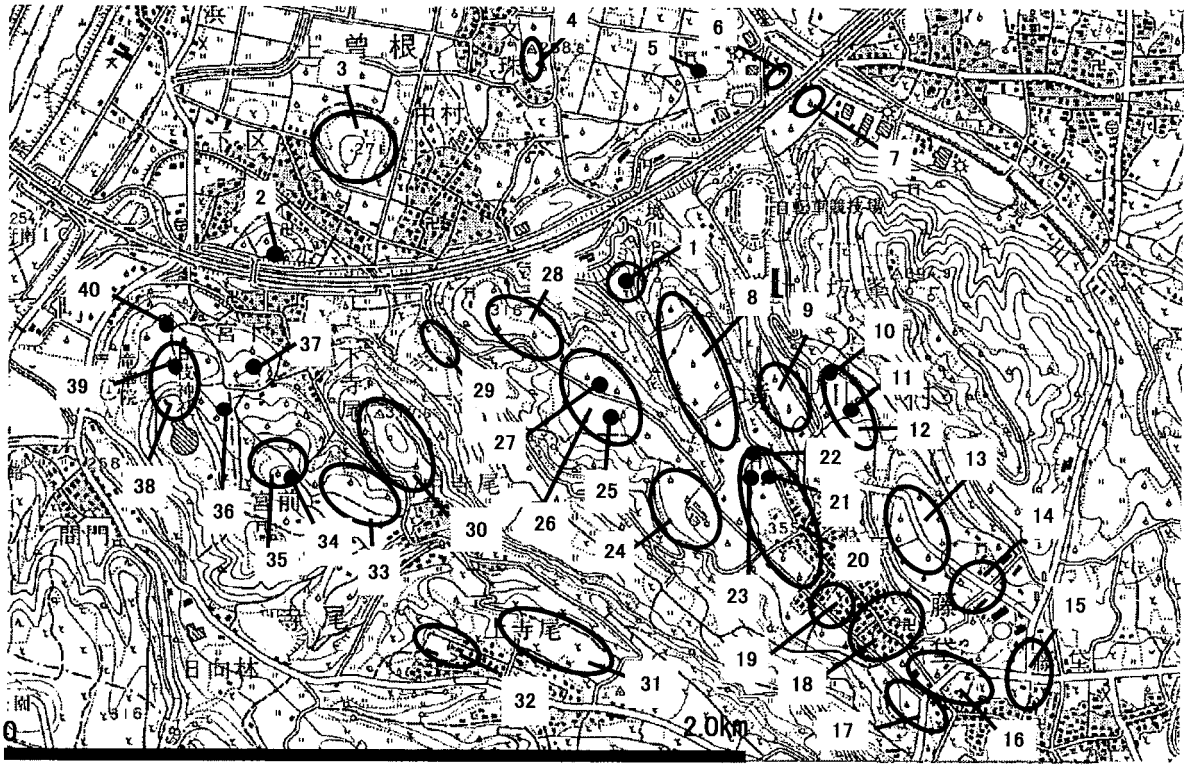
第２節　歴史的環境（第２図）

笛吹市は、旧東八代郡下の石和町、御坂町、一宮町、八代町、境川村、東山梨郡下の春日居町が合併して誕生した市である。これらの町村は、県内でも有数の遺跡の集中地域であり、周知されている遺跡の数でも八ヶ岳南麓に位置する北杜市に次いで２番目に遺跡や史跡の数が多い市である。これをふまえ、御所山遺跡周辺に所在し、発掘調査が実施されるなど主な遺跡についてふれてみたい。

旧石器時代では、発掘調査による資料は少ないものの、諏訪尻遺跡⑻で発掘調査により、ナイフ形石器や尖頭器が出土しており、辻遺跡⒂から半円錐形の石核や剥片など表採されている。旧境川村内では御所山遺跡が所在する藤垈地域一帯が該期の生活に適した地域であったことが考えられる。

縄文時代では、本遺跡の谷を隔てた約300ｍ南東側に諏訪尻遺跡⑻が存在する。平成９年（1997）度～平成10年（1998）度に埋蔵文化財センターが調査を実施し、縄文時代前期末の住居跡３軒、集石土坑１基、土坑15基が確認され、縄文時代前期の土偶など含め、数多くの遺構や遺物が確認されている。また、北の宮遺跡⒀は、平成４年度に旧境川村村道339号の改良工事に先だって調査が行われ、縄文時代前・中期の遺物や確認されている。





御所山遺跡と周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	御所山遺跡	古墳(前)・近世	15	辻遺跡	縄文・古墳	29	飯浦遺跡	中・近世
2	無名墳	古墳	16	室屋遺跡	古墳・近世	30	北ノ山遺跡	縄文・弥生・古墳
3	勝山城跡	中世	17	前在塚遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	31	北原遺跡	縄文・弥生・古墳
4	お文殊さん古墳	古墳	18	原氏屋敷	中・近世	32	白戸遺跡	縄文・平安
5	八乙女塚古墳	古墳(表門神社古墳)	19	諏訪前南遺跡	縄文・古墳	33	天神遺跡	縄文・弥生・平安
6	口開遺跡	弥生	20	諏訪前遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	34	物見塚古墳	古墳
7	下向窯跡	古墳・近世・近代	21	諏訪前三号墳	古墳	35	物見塚遺跡	縄文・弥生・古墳
8	諏訪尻遺跡	縄文・弥生・古墳	22	諏訪前二号墳	古墳	36	無名墳	古墳
9	八乙女遺跡	縄文・古墳	23	諏訪前一号墳	古墳	37	天神山古墳	古墳
10	塚の越三号墳	古墳	24	天神前遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	38	朝日遺跡	弥生・古墳
11	塚の越一号墳	古墳	25	飯浦二号墳	古墳	39	無名墳	古墳
12	後子の神遺跡	縄文・弥生・古墳	26	下原遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	40	無名墳	古墳
13	北の宮遺跡	縄文・古墳・平安	27	飯浦一号墳	古墳			
14	大塚古墳	古墳	28	天神山遺跡	縄文・弥生・古墳			

第２図　遺跡の位置と周辺の遺跡

天神遺跡㉝では平成２年（第１次）に発掘調査が行われ、縄文時代の住居跡１軒や土坑が検出されている。

弥生時代については、前期・中期の調査事例はほとんどみられないものの、弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、諏訪尻遺跡⑻で検出されている弥生時代後期の住居跡14軒、古墳時代前期の住居跡10軒、低墳丘古墳２基、方形周溝墓1期等が確認されているほか、一覧表以外にも御所山遺跡から約２㎞程離れた上ノ平遺跡方形周溝墓や、国史跡の銚子塚古墳等、旧中道町の風土記の丘曽根丘陵公園一帯が、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、この一帯が一つの時代の中心地であったことは間違いないであろう。古墳時代後期になると、旧境川町内には、約80基の後期古墳の存在が知られているがそのほとんどが、５世紀以降に築造されているとしている。

御所山遺跡周辺の遺跡分布をみても、該期の古墳の分布が多いことが解る。これは、旧中道町を中心とした県内最古の古墳や、最大級の古墳の存在（古墳時代前期～中期）から一大勢力を形成しており、その後、古墳時代後期に旧境川町周辺一帯にも及んできたことが想定される。

また、薊在塚遺跡⒄などで該期の住居跡など調査されているが、今後、古墳の存在から考えていくと周辺部における大規模集落の存在の可能性も考えられる

奈良～平安時代について、室屋遺跡⒃では、発掘調査は行われていないが、古代の瓦が採集されており注目されている。天神遺跡㉝では平安時代の住居跡２軒や縄文時代や中世の、墓坑等が検出されている。また、平成10年度（第２次）には、縄文時代中期後半、平安時代の住居跡１軒、土坑１基、溝１条、ピット19基が検出され、遺物も縄文時代と平安時代の遺物が出土している。物見塚遺跡㉟では、羽口や鉄滓等が出土した土坑が確認されており、平安時代の鍛冶関連遺構であることが示唆されている。

引用・参考文献

『諏訪尻遺跡』山梨県教育委員会　2000
『物見塚遺跡』境川村教育委員会　1985
『天神遺跡』　境川村教育委員会　1993
『北ノ宮遺跡』境川村教育委員会　1996
『天神遺跡（２次）・立石北遺跡（３次）・北原遺跡』境川村教育委員会　2004

第３章　調査の方法と基本層序

第１節　調査方法（第１・３図）

本遺跡は、平成20年度の土捨場造成に伴う協議に基づき、平成21年６月に新たな造成箇所に試掘調査を実施し、遺構や遺物が確認された約600㎡について、平成21年10月に本調査を実施することとなった。

発掘調査については、調査区の東側から行ない、試掘調査のデータを元に、表土については、重機により遺構や遺物の確認面（黄褐色粘質土）直上まで除去し、それ以降については、人力により精査を行ないながら遺構、遺物の確認と検出に努めた。また、雑木林であったため、木の根等が複雑であったが、大きいものは抜根せず、残しながら掘り下げ、調査を行なった。各遺構については、平面プランを確認後、土層確認用のベルト等を設定しながら調査を行なった。

グリッドの設定については、世界測地系の座標にあわせた５m四方のメッシュで調査区全域に設定し、グリッド名称については、南北方向を北から南に１～７、東西方向は東から西にＡ～Ｃとし、Ａ－１グリッドは調査区外となるが、Ｂ－１グリッド杭の座標は、Ｘ＝－44470、Ｙ＝9450、Ｃ－７グリッド杭の座標が、Ｘ＝－44500、Ｙ＝9445となる。

第２節　基本層序

御所山遺跡の地理的環境は第２章第１節でふれているが、丘陵上に立地しているということもあり、土層の堆積は、あまり見られず遺構確認面を含め３層である。１層には腐植土（暗褐色粘質土）が0.2～0.3m程堆積し、２層目には褐色粘質土が見られ、0.2～0.3m程度堆積している。その下に遺構確認面である黄褐色粘質土が見られる。

第４章　発見された遺構と遺物

第１節　遺　　構

第１項　住居跡

本遺跡から検出された住居跡は、１軒のみである。

○１号住居跡（第４・９・10　図）

〔位置〕Ｂ－４・５、Ｃ－４・５グリッドに位置する。住居内に土坑が２基見られるが、本住居跡に伴うものか、単独なのかは、出土遺物がないため不明である。

〔形状〕長辺6.1m、短辺3.9mの隅丸長方形を呈するが、南東コーナー付近は緩やかに曲がる。

〔覆土〕深さ0.3m程の覆土で、暗褐色粘質土が主体となる。

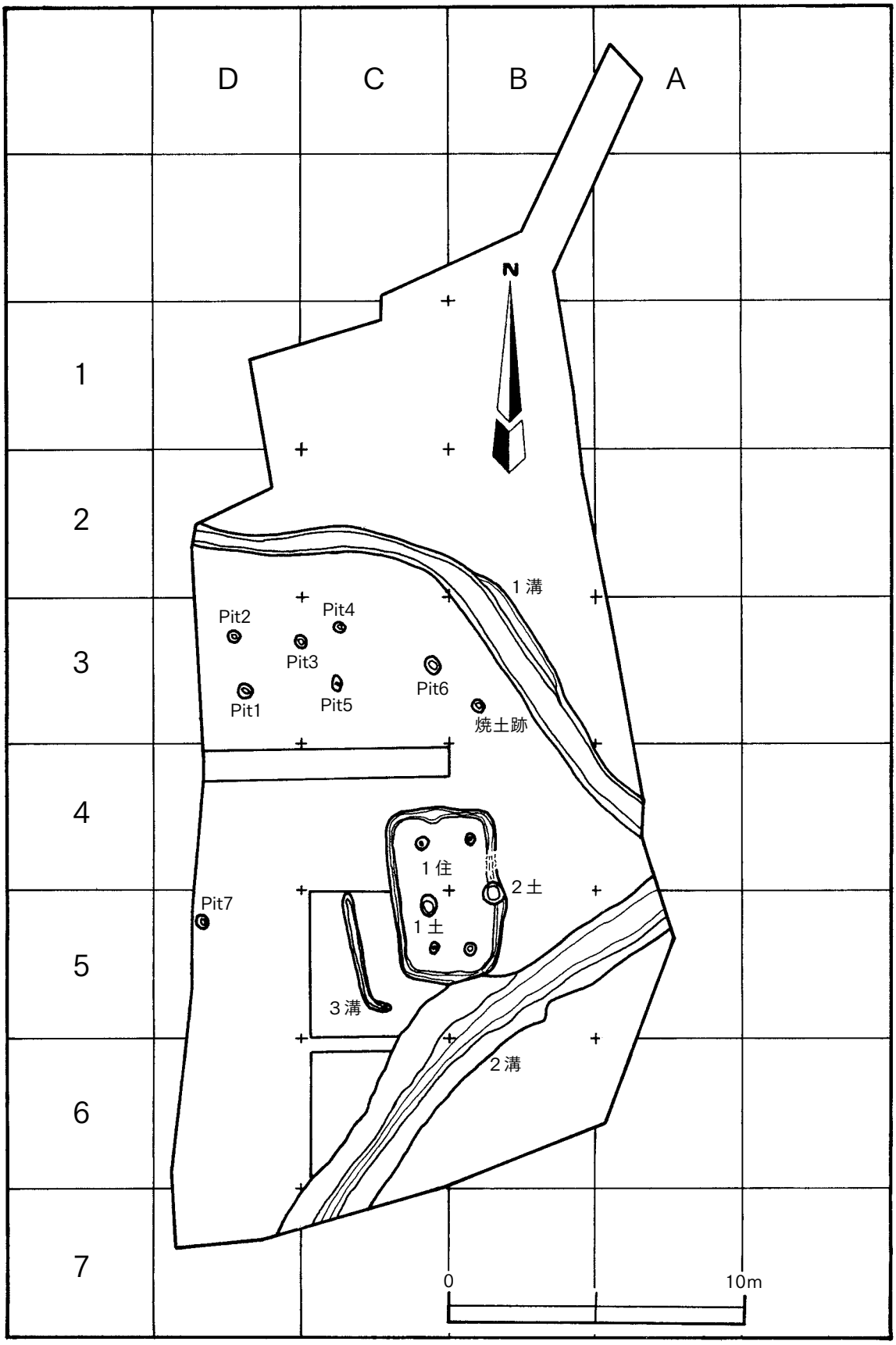
〔 壁 〕緩やかに立ち上がり、0.25～ 0.30mを測る。壁際には、幅0.12～0.45m、深さ0.1～0.30mの周溝が住居内を全周する。

〔床の状態〕しっかりとした硬化面が、全体に見られる。

〔柱穴〕住居内に柱穴は4基見られる。ピット１は、南西コーナー付近に位置し、直径0.35mの円形を呈し、深さ0.4mを測る。ピット２は、南東コーナー付近に位置する。長径0.40m、短径0.35mのほぼ円形を呈し、深さ0.2mを測る。ピット3は、北東コーナー付近に位置し、長径0.25m、短径0.30mのほぼ円形を呈し、深さ0.15mを測る。ピット4は、北西コーナー付近に位置し、長径0.30m、短径0.35mのほぼ円形を呈し、深さ0.30mを測る。

〔その他の施設〕北側壁中央に梯子受け穴が見られる。

〔遺物〕北側壁中央付近や、北西付近に小破片ではあるが台付甕、甕の口縁部が確認されている。



第３図　御所山遺跡全体図・グリッド配置図（Ｓ＝1/200）

〔時期・時代〕古墳時代前期に位置づけられる。

第２項　土　坑

本遺跡から、土坑２基が確認されている。いずれも、１号住居跡内にみられるが、２基とも出土遺物は無く、時代・時期は不明である。

○１号土坑（第４図）

〔位置〕１号住居跡内のＣ－５グリッドに位置する。

〔形状〕長径0.7m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。平面形は、ほぼ円形。断面形は、鍋形を呈する。壁は、西側0.3m、東側0.2mの高さを測り、底面は平底を呈する。

〔覆土〕暗褐色粘質土が主体となる。

〔遺物〕無し。

〔時期・時代〕土坑内から遺物の出土は見られないため、土坑の時期や時代は不明である。

○２号土坑（第４図）

〔位置〕１号住居内のB－4・5グリッドに位置する。１号住居跡に関する施設の可能性も考えられる。

〔形状〕土坑の東側が、１号住居跡の周溝と重複するため、全体の規模や形状は不明である。推定直径0.67m、深さ0.10mを測る。平面形は、ほぼ円形を呈すると思われる。断面形は、鍋形を呈する。壁は、西側0.2m、東側は周溝が重複するため、不明である。底面はやや丸底を呈する。

〔覆土〕暗褐色粘質土が主体となる。

〔遺物〕確認できなかった。

〔時代・時期〕土坑内から遺物の出土は見られないため、土坑の時期や時代は不明である。

第３項　溝状遺構

本遺跡から、溝状遺構が3条確認されている。

○１号溝状遺構（第５・９・10図）

〔位置〕Ｂ・Ｃ・Ｄ－２、Ｂ－３、Ａ・Ｂ－４グリッドに位置し、調査区のやや北側、西から南東方向に緩やかに傾斜している。

〔形状〕現状の長さ19.2m、幅0.6～1.1m、深さ0.23～0.70mを測り、南東方向で丘陵の斜面とつながる。断面はすり鉢状を呈する。

〔覆土〕暗褐色粘質土が主体となる。

〔遺物〕19世紀前半代の陶磁器類が出土しているが、縄文時代の磨石等も出土している（第９・10図）

〔時代・時期〕出土遺物から19世紀前半以降と考えられる。

○２号溝状遺構（第６・９図）

〔位置〕Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ－６・７グリッドに位置し、調査区南端、南西～北東方向に緩やかに傾斜している。また、１号住居跡と北東側が重複している。

〔形状〕調査区南橋のため、南西側及び北東側が調査区外に延びるため、全体の形状は不明であるが、現状の長さ12.3m、幅1.3～2.7m、深さ0.5～0.76mを測る。断面形は両壁が緩やかに立ち上がりラッパ状を呈し、底面近くでさらに落ち込む。

〔覆土〕黒褐色粘質土が主体をなし、底面には湧水が見られた。

〔遺物〕黒曜石の剥片も覆土中からみられたが、陶磁器類や火鉢底部が覆土中から出土している。

〔時代・時期〕出土遺物から19世紀前半以降と考えられる。

○３号溝状遺構（第４・９図）

〔位置〕C－5グリッド、１号住居跡の西側に位置する。３号溝状遺構は確認された住居跡の南西コーナーと1.3m程の間隔で平行して確認されており、住居跡の拡張等に関する周溝の可能性も考えられる。

〔形状〕長さ4.3m、幅0.15～ 0.3m、深さ0.1mで、前述したように住居跡南西側コーナーとＬ字型に平行している。

〔遺物〕溝状遺構南側より、古墳時代前期の甕の胴部破片が出土している。

〔時代・時期〕住居跡と同様、出土遺物から古墳時代前期に位置づけられる。

第４項　焼土跡（第７図）

本遺跡において、焼土跡１基が確認されている。

〔位置〕Ｂ－３グリッドに位置する。

〔形状〕長径0.45m、短径0.40mを測り、平面はほぼ円形を呈する。焼土は、厚さ0.1m程の堆積が見られた。
焼土下部には暗褐色粘質土が見られ、深さは0.2mを測る。

〔遺物〕全く見られなかった。

〔時代・時期〕出土遺物が見られないため、時期・時代の特定は難しい。

第５項　ピット（第７・８図）

本遺跡から、７基のピットが確認されている。建物跡や柵列のように規則性は全く見られない。

ピット１～７号における形状・規模は次のとおりである。

〔表１〕　ピット一覧表

遺構名	位置（グリッド）	平面形	長軸（m）	短軸（m）	深さ（m）	備　考／その他
ピット１	Ｄ－３	不整円形	0.48	0.40	0.10	出土遺物なし
ピット２	Ｄ－３	ほぼ円形	0.35	0.30	0.25	出土遺物なし
ピット３	Ｃ・Ｄ－３	楕 円 形	0.35	0.28	0.10	出土遺物なし
ピット４	Ｃ－３	ほぼ円形	0.38	0.33	0.10	出土遺物なし
ピット５	Ｃ－３	不 整 形	0.58	0.38	0.20	出土遺物なし
ピット６	Ｃ－３	円　　形	0.67	0.60	0.45	出土遺物なし
ピット７	Ｄ－５	ほぼ円形	0.40	0.35	0.20	出土遺物なし

第２節　遺　　物

本遺跡の出土遺物については、極めて少ない状況であり、できる限り図示できるものを掲載した。また、各遺物の法量などの詳細については表２遺物一覧表を参照されたい。

第１項　住居跡出土遺物（第９図１～３・第10図４）

本遺跡から住居跡は１軒が検出され、出土遺物もごく少量ではあるが、古墳時代の台付甕、甕の口縁部や胴部等の破片が、住居跡内周溝内から出土している。出土遺物から、古墳時代前期に位置づけられる。

第２項　溝状遺構内出土遺物（第９図４～15・10図１～２）

溝状遺構は３条検出されており、１・２号溝状遺構からは近世の陶磁器片等が出土し、３号溝状遺構からは、古墳時代前期の甕などの破片が出土している。

第３項　土　坑

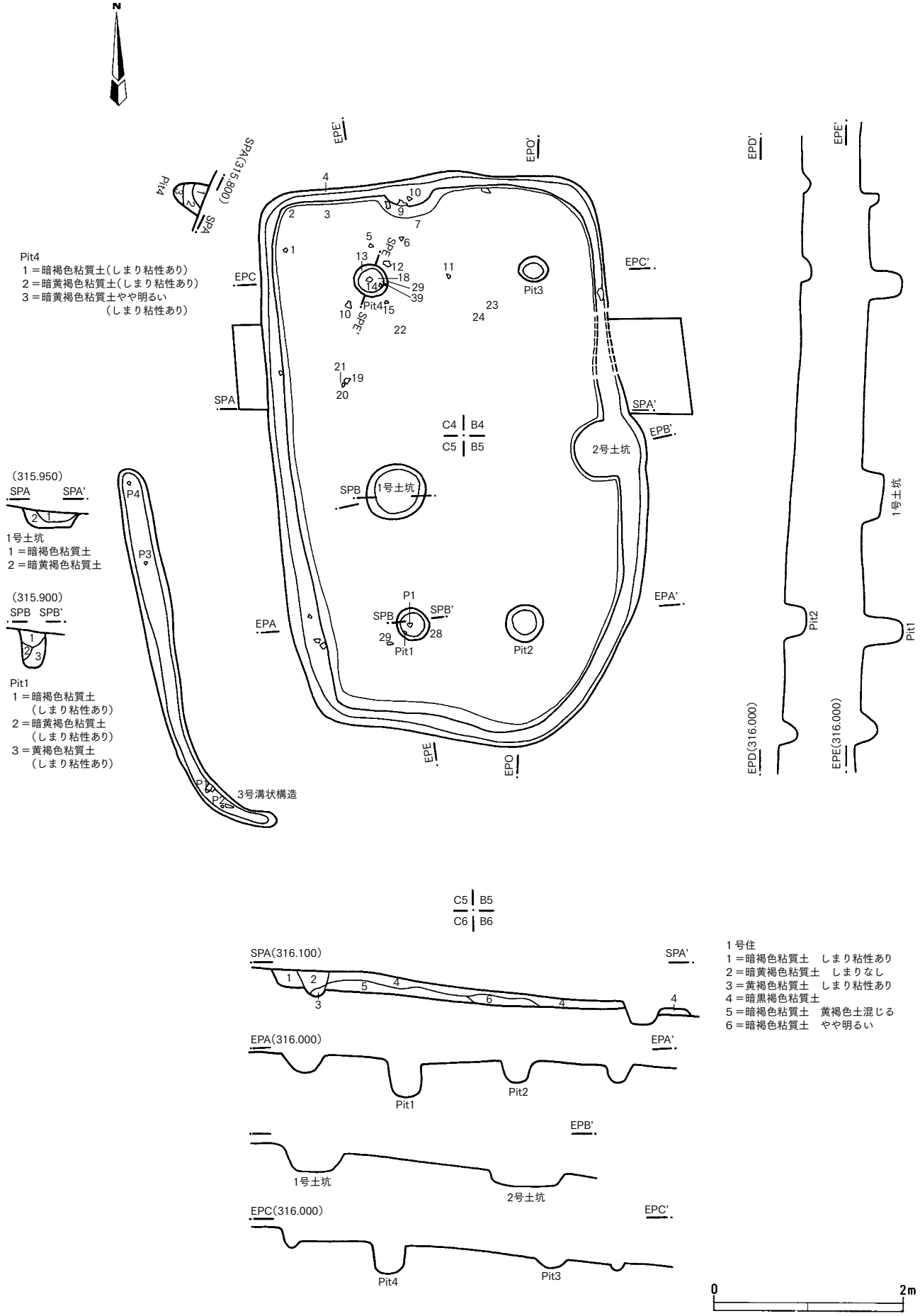
住居に伴うものかどうか不明であり、また、出土遺物も見られないため、時期・時代は両者とも不明である。

第４項　焼土跡

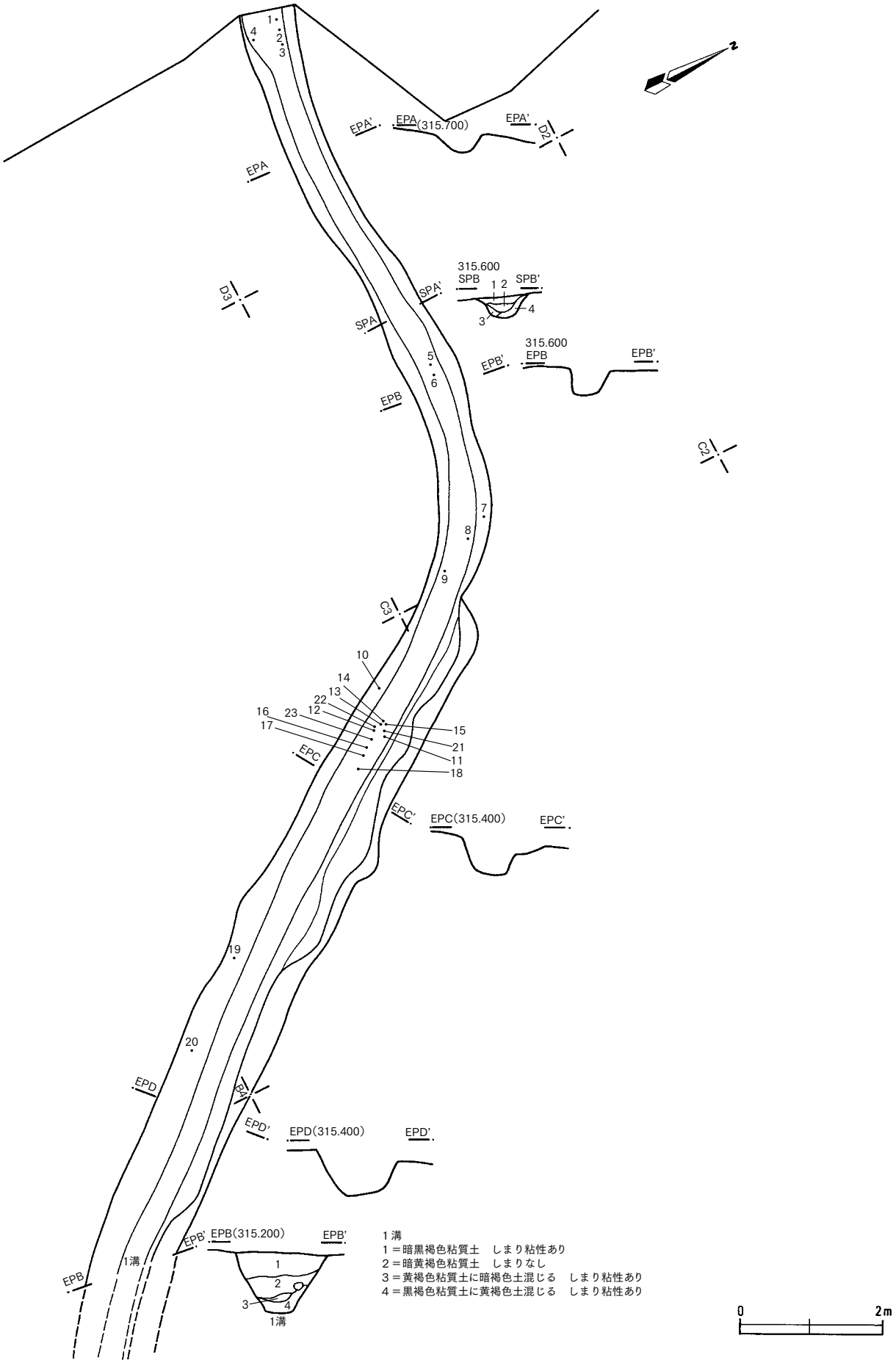
出土遺物は見られなかったため、時期は不明である。

第５項　ピット

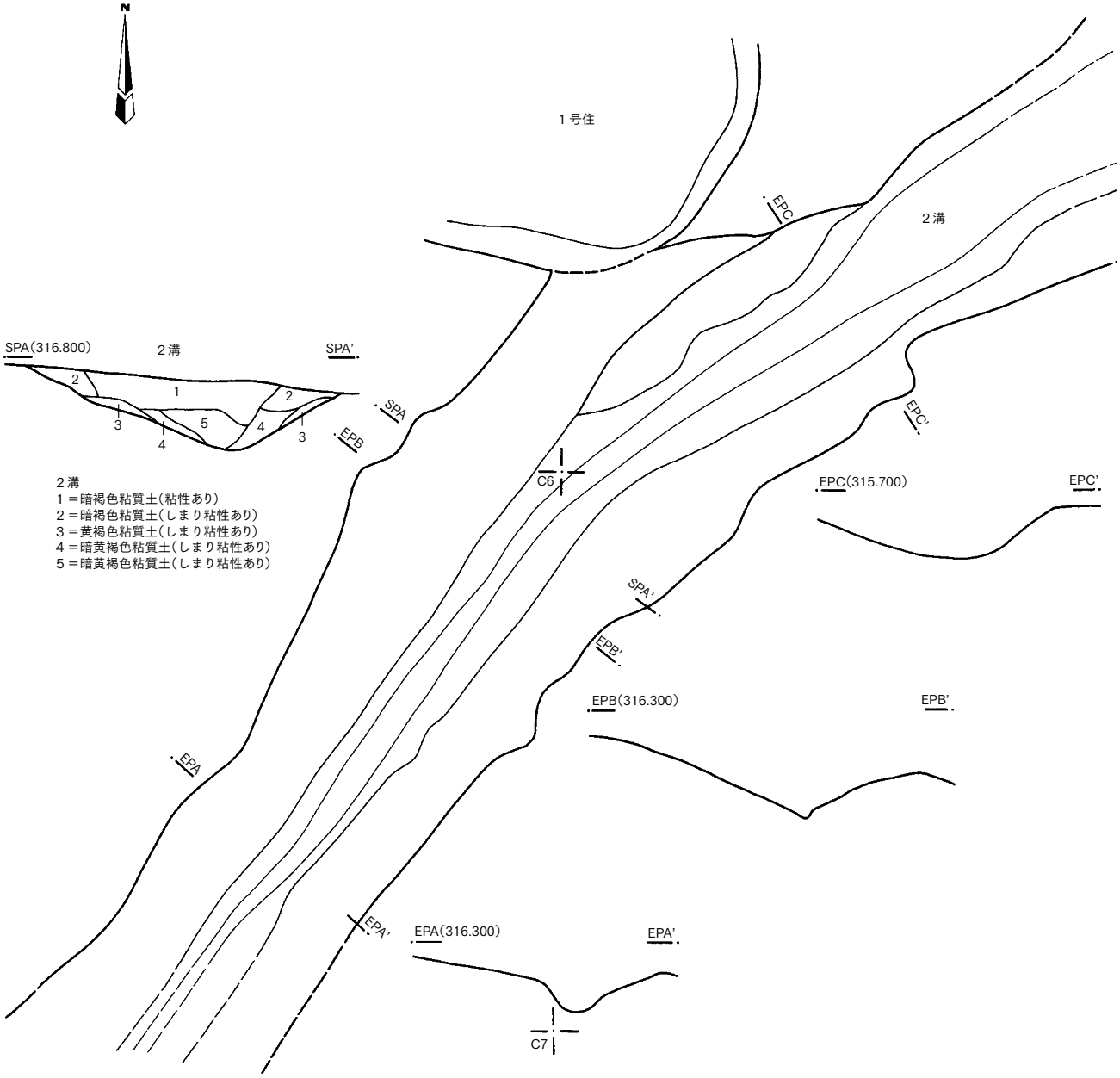
出土遺物は見られなかったため、時期は不明である。

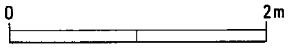


第４図　第１号住居跡、第３号溝状遺構、第１・２号土坑（Ｓ＝1/60）

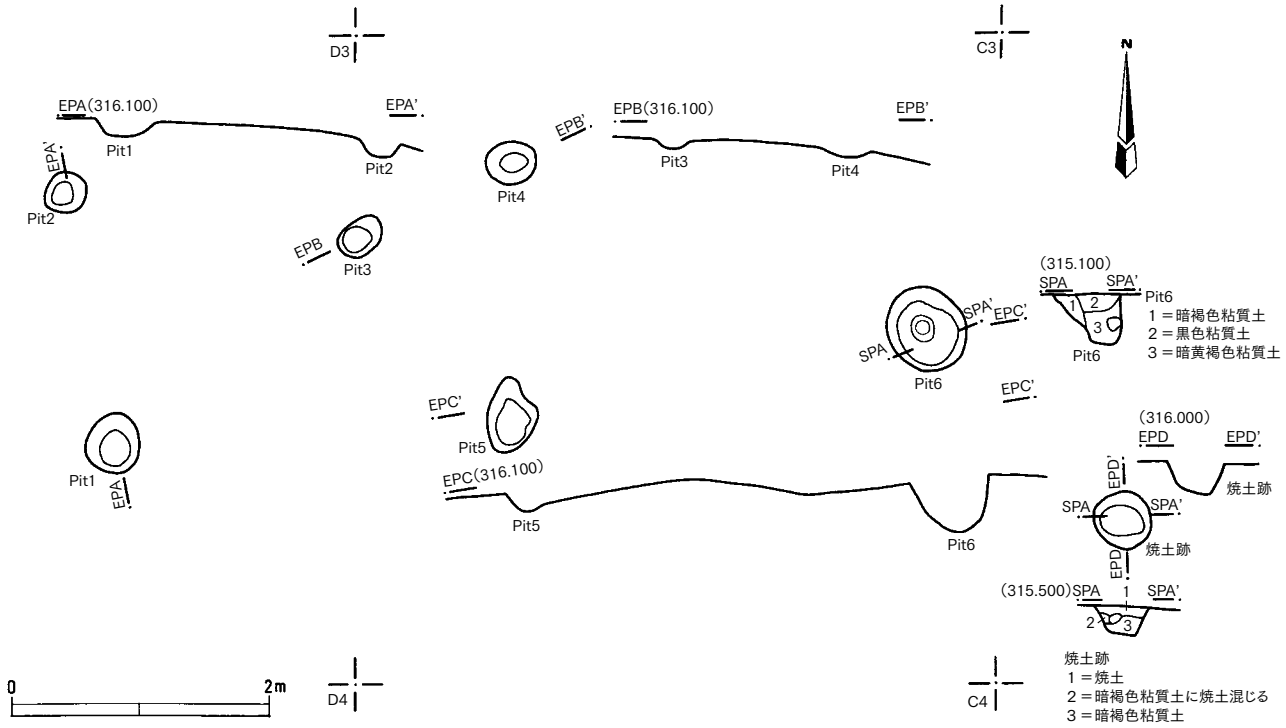


第５図　第１号溝状遺構（Ｓ＝1/80）

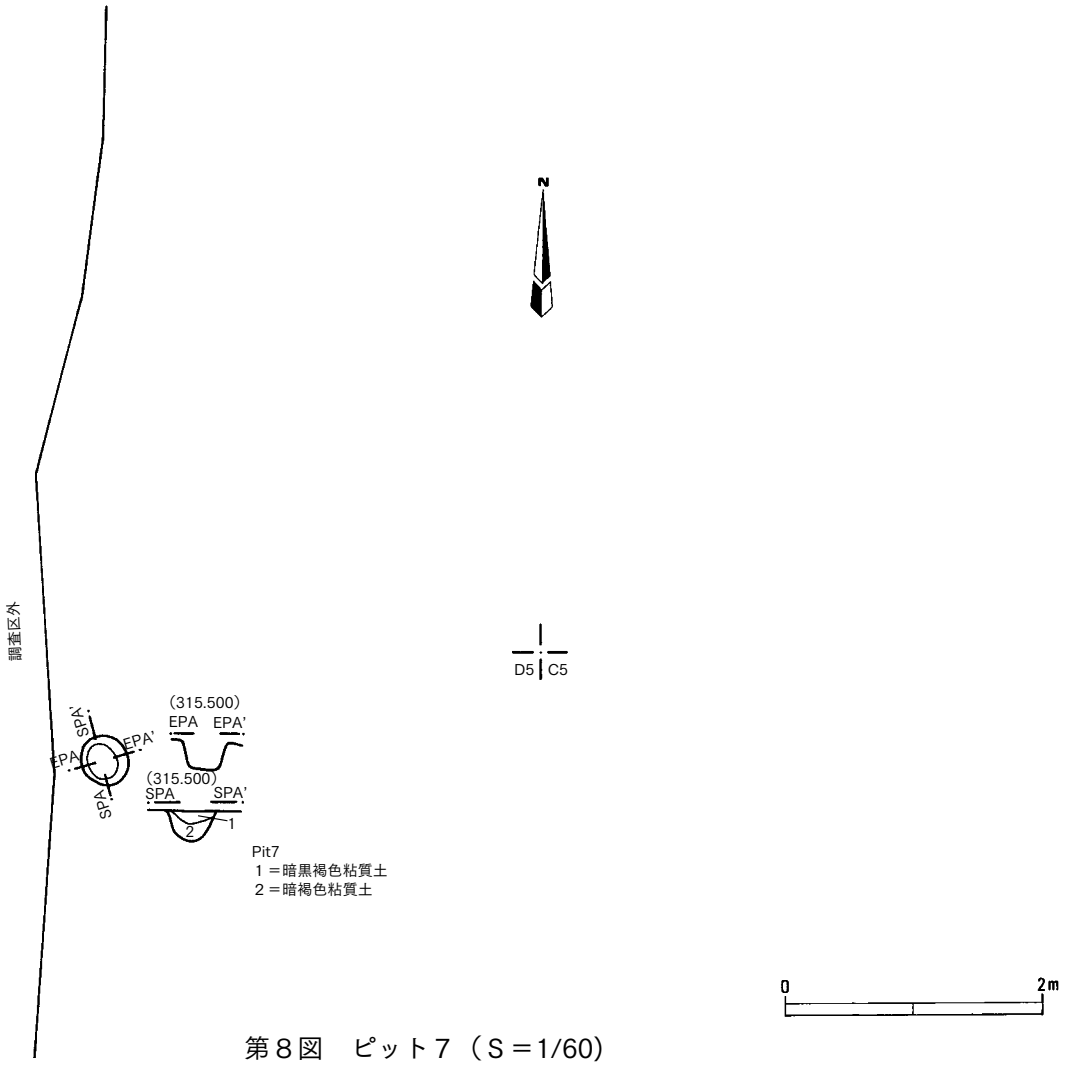




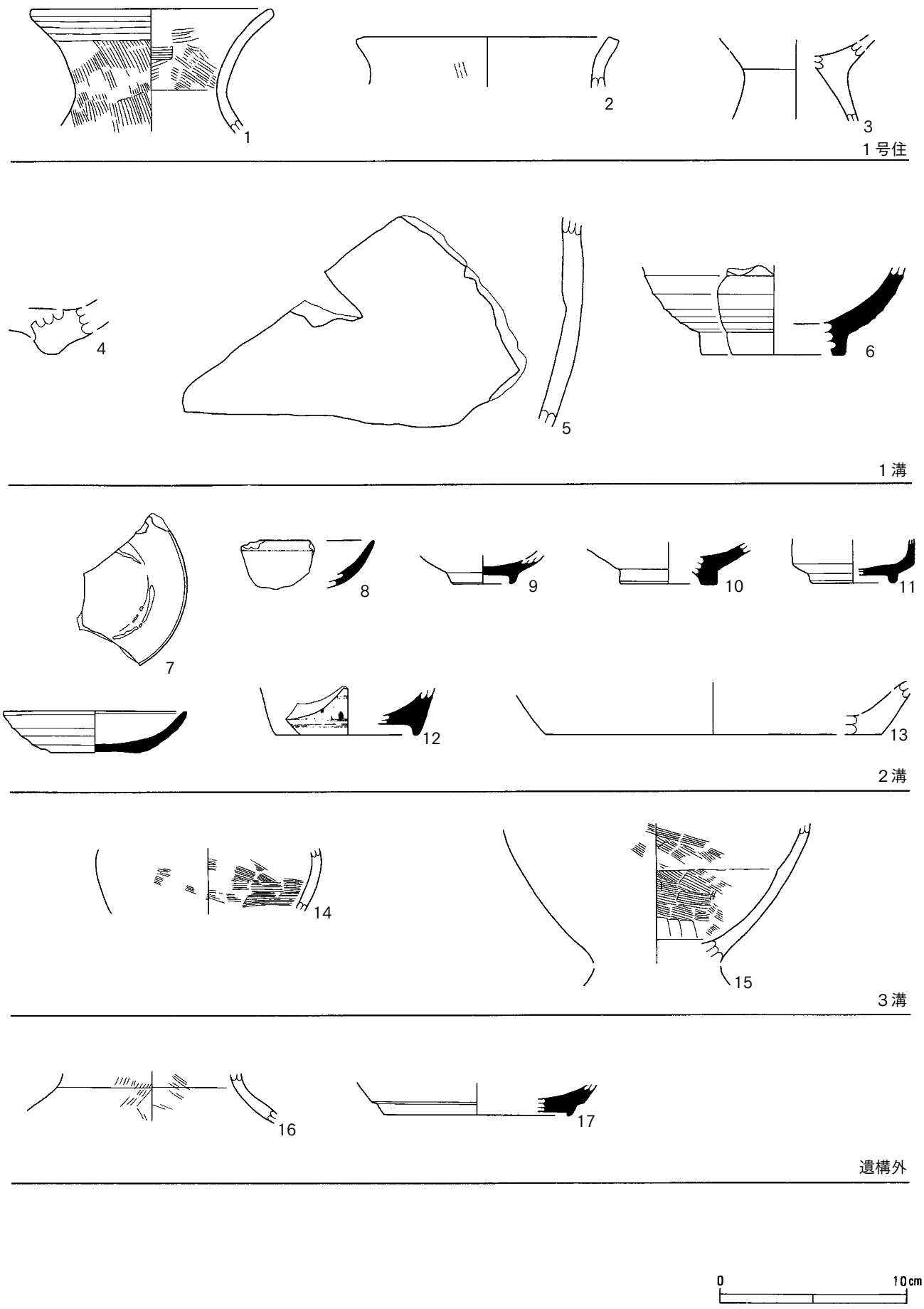
第６図　第２号溝状遺構（Ｓ＝1/60）



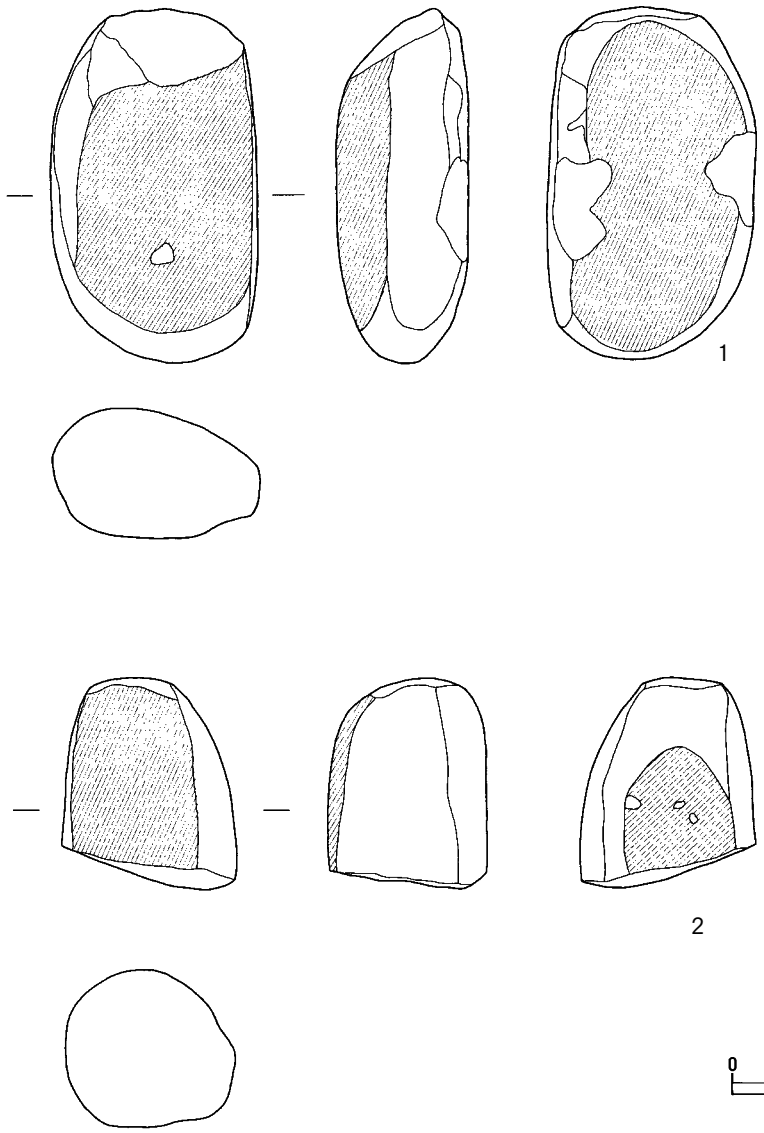
第７図　ピット１～６、焼土跡（Ｓ＝1/60）

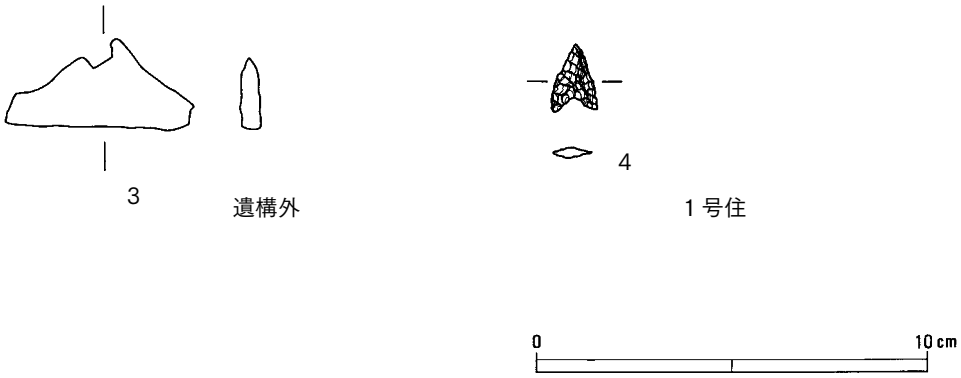


第８図　ピット７（Ｓ＝1/60）



第９図　出土遺物（その１）（Ｓ＝1/3)





第10図　出土遺物（その２）

〔表２〕遺物一覧表

◎土器

図版番号	挿図番号	出土位置	遺物番号	種別	器形	法量（㎝）			色調	胎土	焼成	調整他	備考
						口径	器高	底経					
9	1	１号住居跡	9	土器	甕	(13.0)	－	－	明黄褐色	砂粒多く含む	良	内・外面ハケ調整、口縁上部ナデ調整	口縁部～頸部
9	2	〃	8	土器	甕	(14.1)	－	－	にぶい赤褐色	長石等砂粒多く含む	やや良	不明瞭	口縁部
9	3	〃	17	土器	台付甕	－	－	－	にぶい赤褐色	長石等砂粒多く含む	やや良	不明瞭	胴下半～台部
9	4	１号溝状遺構	2	土器	鉢類	－	－	－	にぶい赤褐色	緻密	良		火鉢類
9	5	〃	6	土器	甕類	－	－	－	赤褐色	緻密	良		
9	6	〃	17	陶器	碗（大碗）	－	－	(7.7)	淡白色	緻密	良	内外面に灰釉	
9	7	２号溝状遺構	4	陶器	皿	(9.9)	(2.3)	(4.8)	褐色	緻密	良	内外面に鉄釉	灯明皿
9	8	〃	一括	磁器	碗（小碗）	－	－	－	淡白色	緻密	良		
9	9	〃	3	陶器	碗（小碗）	－	－	(3.2)	淡白色	緻密	良		
9	10	〃	12	陶器	碗（中碗）	－	－	(5.1)	（内）淡白色／（外）赤褐色	緻密	良	外面鉄釉	
9	11	〃	一括	陶器	筒形碗	－	－	(4.4)	淡橙色	緻密	良		
9	12	〃	9	磁器	瓶類	－	－	(7.5)	淡白色	緻密	良	外面染付/透明釉/手描	中瓶
9	13	〃	11	土器	鉢類	－	－	(18.0)	暗黒褐色	長石等砂粒多く含む	やや良	胴部過半部に※型のタタキ目	火鉢類
9	14	３号溝状遺構	2	土器	甕（胴部）	－	－	－	にぶい赤褐色	緻密：金雲母	良	内面ハケ調整	
9	15	〃	1	土器	台付甕	－	－	－	にぶい赤褐色	緻密：金雲母	良	内面ハケ調整	
9	16	遺構外	－	土器	甕	－	－	－	にぶい赤褐色	長石等砂粒多く含む	やや良	内外面ハケ調整	
9	17	〃	－	陶器	碗？（大碗）	－	－	(10.0)	淡緑色	緻密	良	内外面灰釉	瀬戸美濃系

◎石器／その他の遺物

図版番号	挿図番号	出土位置	遺物番号	種類	石材材質	法量（㎝）			重量（g）	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
10	1	１号溝状遺構	12	磨石	安山岩	13.6	7.8	4.9	820.2	磨面３面、一部欠損
10	2	１号溝状遺構	11	磨石	安山岩	8.0	3.4	5.9	454.6	磨面３面、一部欠損
10	3	Ｂ－6G	－	不明鉄製品	鉄	7.0	3.4	0.7	12.2	火打ち金？
10	4	１号住居跡	－	石鏃	黒曜石	2.7	1.8	0.5	1.3	完形

第５章　総　　括

御所山遺跡は、山梨リニア実験線境川土捨場造成工事に伴うもので、平成９（1997）年と平成10（1998）年には同事業として、御所山遺跡に隣接する諏訪尻遺跡の発掘調査が行われている。

その時点に於いては、今回の調査範囲は含まれておらず、再度、範囲確認調査を行ったところ、約600㎡程の狭小の範囲に、住居跡、溝跡、土坑、焼土跡、ピット等の遺構や、それに伴って遺物も確認されたため今回の本調査に至った。

本調査の結果、古墳時代前期の住居跡が１軒検出されており、これについては、平成９・10年度に発掘調査が行われ、同時期の遺構が数多く検出された諏訪尻遺跡との関連性が示唆される。

諏訪尻遺跡は、本遺跡から南東側に直線で約100ｍ程離れた丘陵上に存在し、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡24軒、低墳丘墓２基、方形周溝墓１基が確認されている。

諏訪尻遺跡で確認された弥生時代後期～古墳時代前期に位置づけられる住居跡24軒については、直線距離で約3.0㎞離れた東山南麓の上の平遺跡の方形周溝墓群をはじめとした、小平沢古墳（前方後円墳）、銚子塚古墳（前方後円墳）、大丸山古墳（前方後円墳）、丸山塚古墳（円墳）等の大型古墳が出現し、一大勢力地帯、中道勢力を構成していた一集団の集落であったと考えられている。

本遺跡でも、該期の住居跡は１軒だけではあるものの、諏訪尻遺跡を構成している一集落との一部と想定される。これは、諏訪尻遺跡の住居跡の平面プランが、弥生時代末が楕円形、古墳時代前期が隅丸方形というように規格性が高く、御所山遺跡で確認された住居跡も隅丸方形を呈しており、出土遺物からも該期に比定され、注目される。

本遺跡での住居跡以外の遺構の時代・時期については、近世の溝状遺構以外は、出土遺物がみられないため不明確な部分は多く認められる。

しかし、石鏃や磨石など縄文時代に位置づけられる遺物がみられるが、今回の調査範囲において該期に位置づけられる遺構は明確には、確認されていない。これについて、確認されたピットや焼土跡など縄文時代のものと意図づけた場合を想定すると、一時的な生活拠点もしくは、狩猟の場として、極めて短い期間に存在していたことが考えらる。

御所山遺跡は、極限られた範囲での部分的な発掘調査であったため、その全体像の解明はできないが、調査区周辺にはまだ貴重な我々祖先の足跡が数多く遺されていることは明らかである。

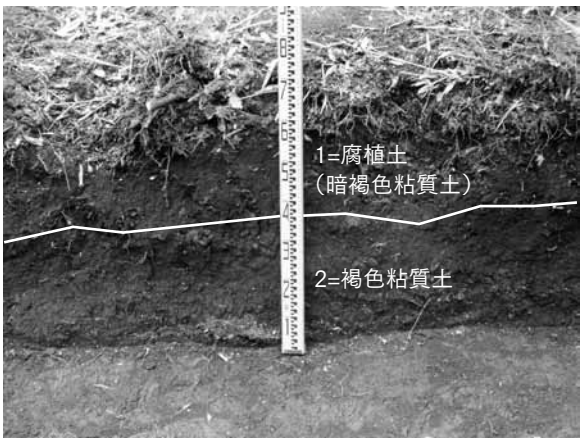
これは、第２章の地理的・歴史的環境で触れているように５世紀以降の古墳が本遺跡周辺に数多く存在しており、古墳時代初頭の一大勢力地帯である中道集団から、それ以降に続く、一大勢力が本遺跡周辺地域に移り、これにより該期の古墳が築造されているのではないかと考えられる。

このことから、今後、周辺地域における開発行為に際しては、注意が必要であり、それにより古墳の性格や位置づけ、該期の集落跡の存在など不透明な部分を解き明かし、本遺跡周辺の歴史的環境を明瞭にしていく必要がある。

写　真　図　版

調査区全景写真（直上から）

調査区全景写真（南西方向から）

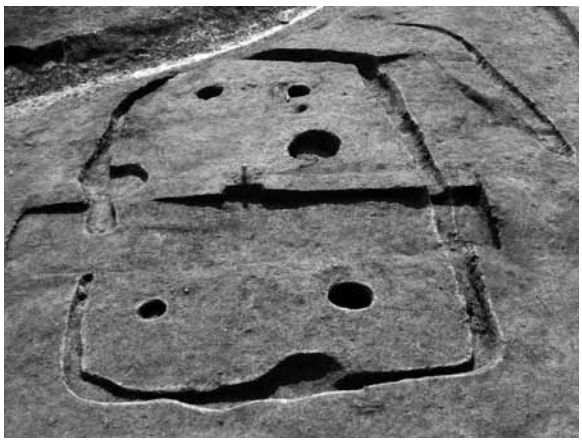


基本層序：土層堆積状況

作業風景

１号住居跡遺物出土状況

１号住居跡東西方向セクション



１号住居跡完掘状況（北から）

１号住居跡完掘状況（南から）

1 号溝状遺構セクション（西側）

1 号溝状遺構（北西部分）

1 号溝状遺構（南東部分）

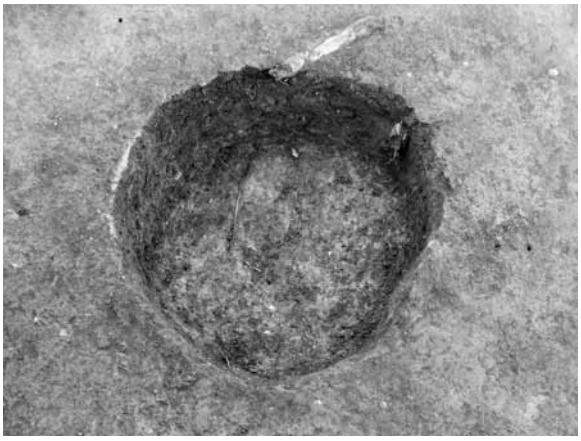
1 号溝状遺構セクション（東側）

1 号溝状遺構（東側）

２号溝状遺構完掘

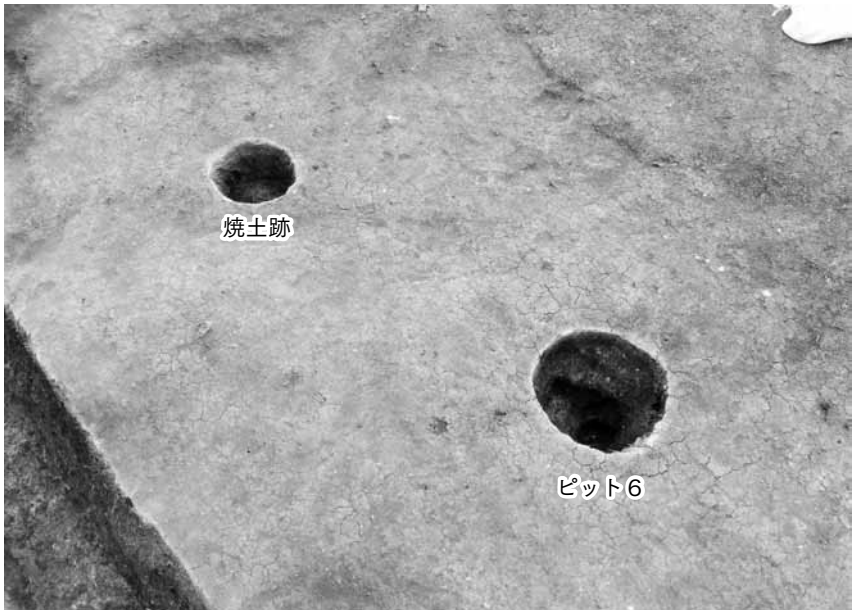
２号溝状遺構セクション

１号土坑セクション



１号土坑完掘

２号土坑完掘



焼土跡・ピット６完掘

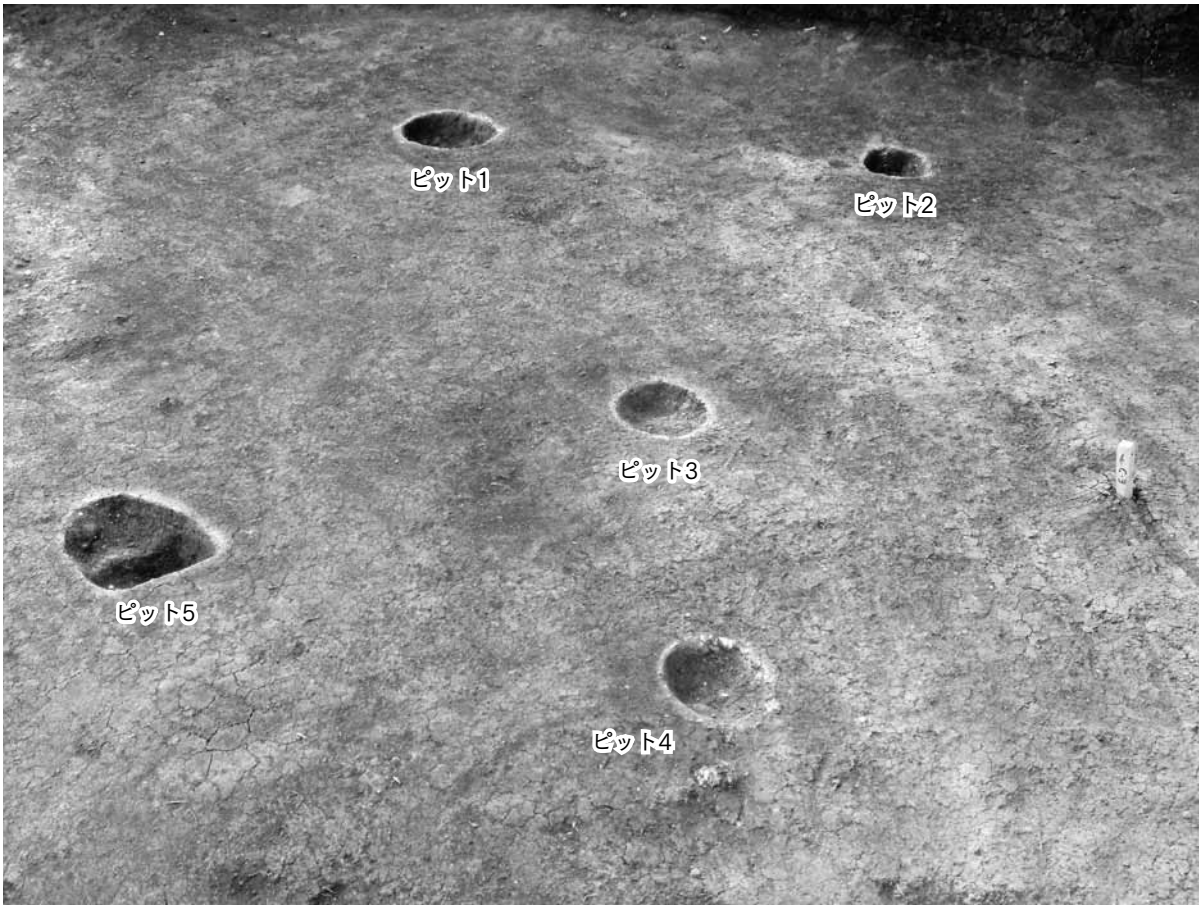
焼土跡セクション

ピット６セクション

ピット１セクション

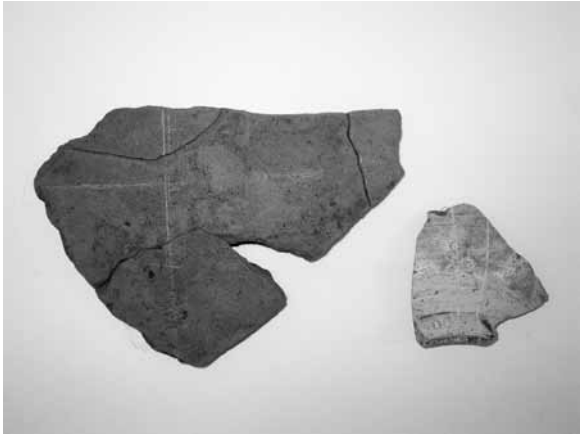
ピット４セクション

ピット７セクション



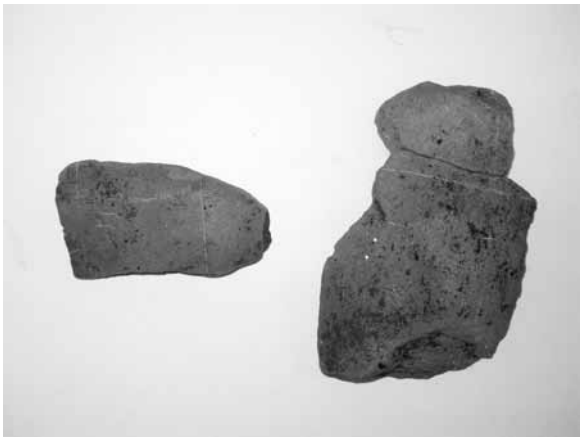
ピット１～５完掘

1号住居跡出土遺物

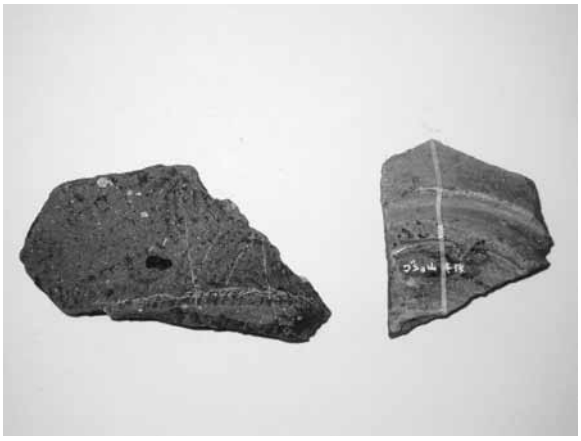


1号溝状遺構出土遺物

2号溝状遺構出土遺物



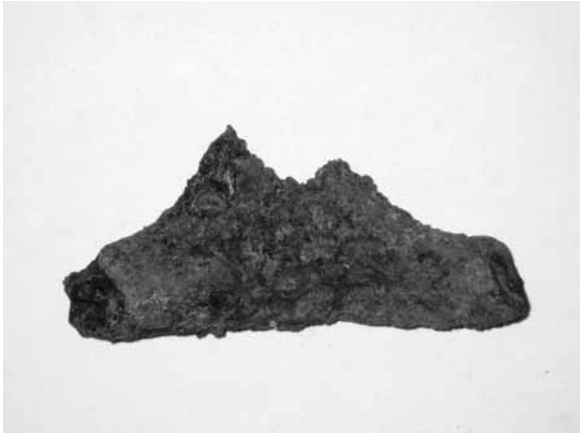
3号溝状遺構出土遺物



遺構外出土遺物

磨　　石

石　　鏃



火　打　ち　金

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごしょやまいせき
書名	御所山遺跡
副書名	山梨リニア実験線境川土捨場造成事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第273集
編著者名	高野玄明
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923　℡055－266－3016
発行年月日	2011年３月　日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ごしょやまいせき	やまなしけん ふえふきし さかいがわまち ふじぬた　あざ ごしょやま　4073ほか	19211		35° 35′ 56″	138° 36′ 15″	平成21年（2009） 10月１日～ 11月10日	600㎡	山梨リニア実験線建設に伴う境川土捨場造成事業
御所山遺跡	山梨県笛吹市境川町 藤垈字御所山4073外							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御所山遺跡	集落跡 散布地	古墳時代 近世	住居跡、土坑、溝状遺構、ピット	土器、石器、陶磁器	

要約

御所山遺跡の存在する笛吹市境川町は、甲府盆地の南東部、僅かな北西部の沖積地を除いて大部分が曽根丘陵上にあり、甲府盆地に突き出す丘陵の先端部、標高317m程に位置し、すぐ北側には、中央自動車道（下り）境川PAが所在する。

御所山遺跡は、狭小な面積での調査ではあったが、古墳時代前期の住居跡と、近世の溝状遺構や土坑等が検出された。曽根丘陵上には、旧石器～中・近世の遺跡が数多く存在する遺跡の宝庫で、御所山遺跡と同時期である古墳時代前期の遺跡も数多く存在し、200m南隣の諏訪尻遺跡でも同時期の住居跡が20数軒確認されている。

このことから、この地域が当時の生活環境や社会背景等安定した拠点的な地域であった可能性がある。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第273集

御　所　山　遺　跡

山梨リニア実験線境川土捨場造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印　刷　日　　2011年（平成23）３月18日
発　行　日　　2011年（平成23）３月25日
編　　集　　山梨県埋蔵文化財センター
〒400－1508　山梨県甲府市下曽根町923
TEL　055－266－3016
http：//www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/index.html
発　　行　　山梨県教育委員会
鉄道建設・運輸施設整備支援機構
印　　刷　　株式会社　少國民社